The Effect of a Class that Consists of Japanese and International Students on Learning the Japanese Language

Yukiko Muramatsu

TUT has offered a new subject, "Intercultural communication I," as part of their master's program in the year 2003. This class makes use of a basic Japanese video, "Yan and the Japanese People." Japanese students learn how to teach the Japanese language to foreigners, and international students learn the Japanese language from Japanese students. This paper examines the effects of this class based on the following points:

1) Are Japanese students able to appreciate Japanese expressions that are difficult for international students?
2) Does this class have a positive effect on students learning basic Japanese?

The results of this analysis show that Japanese students are able to spot more areas that are difficult for basic Japanese learners, and international students can get as close as possible to the common Japanese class from the viewpoint of learning basic Japanese.

日本語初級ビデオ教材を利用した日本人学生・留学生混在型クラスの日本語学習の視点から見た有効性

村　松　由起子

1. はじめに

豊橋技術科学大学では，学部・大学院の留学生を対象に外国人留学生特例科目[1]として日本語・日本事情科目を開講してきた。平成14年度には留学生センターが発足し，6ヶ月間の日本語研修コースが開設されたのを機に，カリキュラムの一部を見直した結果，大学院で開講していた日本語科目を廃止することになり，大学院における特例科目は日本事情のみとなった。しかし，大学院留学生の中には日本語初級レベルの学生もおり，日本語の初級会話を学びたい留学生も少なくない。一方，日本人学生のほうも，本学には留学生が185名[2]在籍しているにもかかわらず，留学生と話したことがない，或いはほとんど話さないという学生もおり，比較的話す機会がある学生でも，同じ研究室の留学生など極限られた留学生との交流になりがちである。このような背景を鑑みて，平成15年度から日本語初級ビデオ教材を利用して，日本人学生・留学生混在型科目として「異文化コミュニケーションI」を新たに開設した。「異文化コミュニケーション」自体はすでに開設されていたので，従来型のクラスは「異文化コミュニケーションII」と改称した。

この新たに開講した「異文化コミュニケーションI」では，教材として日本語初級ビデオ教材を使用するため，留学生は日本語初級会話を学ぶことができ，さらに実際に日本人との会話を通じて実践的な会話練習もできる。一方，日本人学生は，初級レベルの日本語でどの程度の会話が可能かを知ることができ，留学生との会話を通じて，留学生の国について情報を得ることもできる。また，日本人学生の中には漠然と「日本語は難しい」と考えている者もいるため，実際に教えることで何がどのように難しいのか，或いは，本当に難しいのかを具体的に把握する機会ともなる。

本稿では，このクラスの実践報告をするとともに，以下の点からこのクラスの意義を検証してみた。

1. 日本人学生が，留学生の立場から日本語の難易度を判断できるか。
2. 混在型クラスは初級の日本語学習の点から有益であるか。

1については，日本語の文を記載したプリントを配布し，学期の初回と最終回に留学生にとっ

て難しいと思う箇所をわかりやすく修正するという作業を行ってもらい，修正した箇所を調査した。2については，平成14年度まで開講していた大学院向け日本語初級会話クラスとの日本語学習効果を比較した。なお今回，初級会話クラスと混在型クラスの比較には平成14年度に行った期末試験問題を利用した。

2. 講義の流れ

本学では大学院共通科目は1，2学期通しての開講となるが，「異文化コミュニケーションⅠ」の場合，各学期で講義の目的，進め方が若干異なり，平成14年度の初級会話クラスと講義の進度，学習内容の比較が容易なのは1学期のみのため，本稿では1学期分のみを報告する。

使用した教材は，日本語ビデオ教材として広く利用されている『ヤンさんと日本の人々』である。平成14年度まではこの教材を使用して，教師が初級レベルの大学院生に対して日本語初級会話の講義を行っていたが，平成15年度は日本人学生・留学生混在型クラスでこの教材を用いた。受講者は日本人学生35名，留学生20名の計55名である。留学生の日本語レベルは初級から上級までかなり差があり，初級の文法をまだ習得できていない者もいれば学部から進学してきた上級レベルの者もいた。

平成14年度の日本語初級会話クラスと平成15年度の「異文化コミュニケーションI」について，講義の進め方を比較すると以下のようになる。

日本語初級会話クラス（平成14年度）	異文化コミュニケーションI（平成15年度）
（対応なし） →	前回の記録から教師がコメント，解説をしたほうがいい事項を説明
ビデオを見る（2回） →	ビデオを見る（2回）
文法の説明と練習（プリント配布） →	ポイントとなる文法を指摘し，練習する上での注意事項を説明（昨年度講義で使用したプリントを配布）
内容の確認 →	グループに分かれて文法項目を練習しながら会話（配布プリントで留学生の理解度を確認し，その後会話による練習）
ビデオを見る（1回） →	（対応なし）
（対応なし） →	各自で今日の記録を指定用紙に記入（グループの日本人が説明できなかった事項，その他の質問もこの用紙に記入してもらい，次回の初めに教師が説明）

講義では，教師が文法項目の説明を行った後，3〜5名のグループに分かれて文法や会話を練習した。各グループには1，2名の留学生が入るようにし，グループのメンバーは1学期間固定した[3)]。初めてのグループ学習では，日本人学生にとって，初級レベルの留学生と日本語で会話をするのは戸惑いもあったようであるが，配布した練習用プリントが会話を進めるきっかけになっていた。またプリントを用いることで留学生は各課で取り上げられている文法項目の練習ができた。わからないところがあると留学生は日本人学生に質問していたが，日本人学生は日本語教授法を学んだことがなく，外国人に日本語を教えた経験もないため，留学生から質問されるとどのように答えていいのかわからないことも多かった。そこで，グループでの練習中は教師が教室内を巡回し，学生が困ったときは気軽に教師に助けが求められるようにしていたが，留学生の質問には一応答えたものの，自分の答えに自信がなかったり，教師に再確認したかったりすることもあるので，それらは「今日の記録」という用紙に記入すれば，次回に教師のコメントが得られるようにした。記録用紙にはすべての回の記録が1枚の用紙に書けるよう各回ごとの記入欄が設けてあり，講義の度に配布，回収を行った。

グループ学習では，日本語初級会話クラスで行っていた「文法練習」と「ビデオ内容の確認」部分を行ったわけであるが，グループ内の留学生が上級レベルの場合は「ビデオ内容の確認」からさらに進めて，例えばビデオがアパート探しの場面であれば留学生の国の住宅事情を話題にするなどビデオ内容に沿って自由に話し合ってもらった。

このような流れで講義を進め，学生が記入する「今日の記録」によって教師が常にグループ学習の成果を確認できるようにしていった。

3. 日本人学生が考える難しい日本語表現

初回の講義時に10例の日本語文を記載したプリントを配布し，留学生にとって難しいと思われる箇所をやさしい表現に修正する作業を行ってもらった。留学生が難しいと指摘した箇所と日本人学生が難しいと考える箇所を比較するため，留学生にも同じプリントを配布し，難しい表現に下線を引いてもらった。さらに，日本人学生には1学期最終回にも同じ作業をしてもらい，初回に修正したものと最終回に修正したものを比較することで，1学期間のグループ学習を通じて日本人学生が考える難しい日本語に変化が現れたかを検討した。

今回学生に示した日本語文は表1の通りである。表中の下線は留学生がわからないと指摘した箇所であり，表2はそれらを抜き出したものである[4)]。

表1

1. 申し込む場合は，この用紙に記入して，今週中に窓口まで持ってきてください。
2. 今日は雨が降りそうなので，傘を持ってったほうがいいですよ。
3. 今日は6時までにバイトに行かなきゃなんないんで，もう帰る。
4. 昨日，蚊にさされたところがかゆくてたまらない。
5. 薬を飲んで早く寝れば，風邪なんてすぐになおりますよ。
6. 知っていながら教えてあげないのはよくない。
7. 間違いだらけで やり直しをさせられちゃった。
8. 本は1週間しか借りられないので，来週の月曜日までに返却するようにしてください。
9. 外，ざあざあだよ。
10. 終わり次第，内線5555まで連絡をください。

表2

① 申し込む場合は
② 用紙
③ 記入
④ 窓口
⑤ 持ってった
⑥ 行かなきゃなんない
⑦ 蚊にさされた
⑧ かゆくてたまらない
⑨ 風邪なんて
⑩ 知っていながら
⑪ 間違いだらけで
⑫ やり直し
⑬ させられちゃった
⑭ 返却
⑮ ざあざあ
⑯ 終わり次第

留学生が難しいと指摘した箇所は全部で16箇所あった。初級途中段階の学生は文全体に下線を引いていたが，今回は部分的に下線が引かれていたもののみ扱っている。

これら16箇所について，日本人学生が修正しているか否かを調べてみたところ，表3のような結果であった。表3は初回，最終回ともにこの作業を行った日本人学生23名のうち，①～⑯の部分について修正を加えた学生の数と割合である。ただし，修正の仕方はさまざまであり，修正されたものが留学生にとってわかりやすいかまでは問わないことにし，ここでは留学生にとって難しい表現を日本人学生が難しいと認識できるかについてのみ検討してみたい。

表3

留学生が指摘した箇所	初回に修正した日本人学生の数（人）	初回に修正した日本人学生の割合（%）	最終回に修正した日本人学生の数（人）	最終回に修正した日本人学生の割合（%）
① 申し込む場合は	17	73.9	21	91.3
② 用紙	14	60.9	14	60.9
③ 記入	16	69.6	19	82.6
④ 窓口	7	30.4	5	21.7
⑤ 持ってった	21	91.3	23	100.0
⑥ 行かなきゃなんない	23	100.0	23	100.0
⑦ 蚊にさされた	3	13.0	2	8.7
⑧ かゆくてたまらない	23	100.0	22	95.7
⑨ 風邪なんて	21	91.3	23	100.0
⑩ 知っていながら	23	100.0	23	100.0
⑪ 間違いだらけで	23	100.0	22	95.7
⑫ やり直し	8	34.8	6	26.1
⑬ させられちゃった	18	78.3	22	95.7
⑭ 返却	18	78.3	18	78.3
⑮ ざあざあ	23	100.0	23	100.0
⑯ 終わり次第	19	82.6	22	95.7

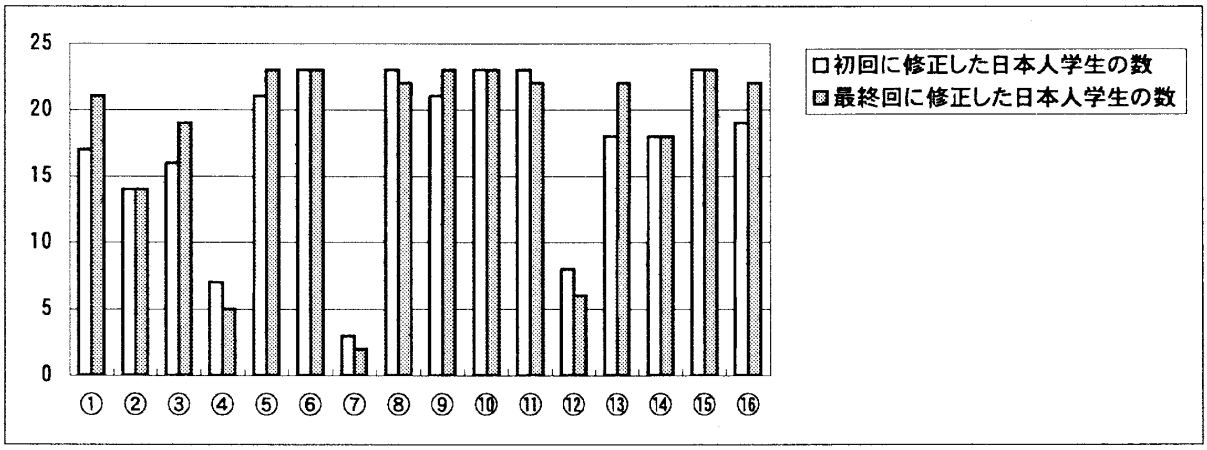

図1

図1は初回と最終回の修正者数をグラフにしたものである。④⑦⑧⑪⑫は最終回で修正者が減っているのに対し，①③⑤⑨⑬⑯では最終回に修正者が増えている。修正箇所によってこのような違いが生じた一因には留学生の日本語レベルの差があると考える。日本人学生はグループ内の留学生と会話練習を行ってきたが，1学期間同じメンバーだったことから，グループ内の留学生が日本語上級レベルであった場合，その留学生の日本語を基準に判断したために修正箇所が少なくなる傾向が見られた。逆に，グループ内に初級レベルの留学生がいた場合は修正箇所が留学生の指摘した箇所と一致しやすくなったと考える。

初回で全員の学生が修正していた⑥⑧⑩⑪⑮は最終回でもやはり同じような結果であった。また，④⑦⑫のように留学生は難しいと感じているのに多くの日本人学生が修正しなかった箇所もあるが，これらも初回と最終回であまり変化が見られなかった。このことから，項目によっては難しさに関する日本人学生の判断には共通した偏りが見られることがわかった。

最後に，グループ学習によって日本人学生が留学生にとって難しい日本語を判断しやすくなったかであるが，最終回に修正が減った数と増えた数を比較してみると，前者が延べ7名，後者が延べ18名で，全体的には修正者数が増えており，最終回のほうが修正されやすくなったといえる。したがって，グループ学習を経験したことで，留学生にとって難しい日本語を判断しやすくなる傾向が見られたといえる。

4. 日本語学習としての有益性

この混在型のクラスが果たして留学生にとって日本語学習に役立つものであるかどうかを確認するため，同じ教材を使用した平成14年度日本語初級会話クラスの1学期の期末試験結果を利用し，学習成果を比較してみた。なお，平成15年度のクラスは試験という形ではなく，最終回に練習問題プリントとして平成14年度の試験問題を配布したので，試験に比べて解答の際の慎重さは若干劣る可能性もあるが，授業時間内に試験に近い環境で解答しているので，両者の比較には支

障がないと考える。ただし，平成14年度は事前にテスト範囲を伝え，学生はテスト勉強をしているが，平成15年度は事前に範囲を伝えておらず，学生もテスト勉強はしていないため，多少得点が低くなると予想された。

以下，まず，平成14年度と平成15年度の留学生の受講数を表4に示す。大学院入学前の経歴によりタイプ別に，①高等専門学校（高専）から学部3年次に編入後修士課程に進学した学生，②研究生から修士課程に進学した学生，③日本語研修コースから修士課程に進学した学生，④英語特別コースの学生[5]，⑤その他の学生（博士課程など），に分けて示す。

表4

学生のタイプ	平成14年度	平成15年度
① 高専からの編入生	0	5
② 研究生からの進学者	2	6
③ 日本語研修コースからの進学者	0	1
④ 英語特別コースの学生	6	4
⑤ その他	1	1
計	9	17[6]

次に，採点結果として，平均点を表5に，標準偏差を表6に示す。なお，①～⑤のタイプのうち，両年度の比較が可能な②研究生からの進学者と④英語特別コースの学生の結果を示すことにする。

表5

	平成14年度	平成15年度
全体の平均点	87.1	85.6
高専からの編入生を除いた平均点	87.1	81.3
研究生からの進学者の平均点	85.0	88.3
英語特別コースのみの平均点	86.4	67.1

表6

	平成14年度	平成15年度
全体の標準偏差	9.5	14.5
高専からの編入生を除いた標準偏差	9.5	15.9
研究生からの進学者の標準偏差	3.0	9.1
英語特別コースのみの標準偏差	11.2	14.8

表5で平成14年度と平成15年度を比較すると，全体の平均点にはあまり差がみられないが，学生のタイプ別に分類した場合，「高専からの編入生を除いた平均点」と「英語特別コースのみの平均点」に差が現れている。この差の要因は表6に現れており，標準偏差の値から，平成15年度のほうが学生の得点にばらつきが生じていることがわかる。このようなばらつきが生じたのは，平成15年度受講者のうち2名が一時帰国をしており，学期途中からの受講となったため，その差が

点数にも現れた結果である。この2名を例外として除いた場合の結果を改めて示したものが表7，表8である。また，平成14年度の英語特別コースの平均点が高いのは，所属は英語特別コースでありながら，日本語は中級レベルに達している学生がいたためである。

表7

	平成14年度	平成15年度
全体の平均点	87.1	89.6
高専からの編入生を除いた平均点	87.1	86.4
研究生からの進学者の平均点	85.0	88.3
英語特別コースのみの平均点	86.4	78.6

表8

	平成14年度	平成15年度
全体の標準偏差	9.5	9.4
高専からの編入生を除いた標準偏差	9.5	9.8
研究生からの進学者の標準偏差	3.0	9.1
英語特別コースのみの標準偏差	11.2	6.1

表7，表8を見ると，上記の平成14年度英語特別コースの事情を考慮に入れれば，今回の混在型クラスでも日本語学習の上で従来の会話クラスに近い効果が得られたといえる。

この結果から，教師が文法解説をし，練習プリントを配布した上でのグループ学習の場合は，日本語学習に関して有益な成果が期待できると考える。ただし，これは文法を中心とした試験用の問題から得られた結果であり，発音，聞き取りなどを含めた総合的な日本語力については今回調査していない。

5. むすび

平成15年度に初めて日本人学生・留学生混在型クラスで日本語初級の学習内容を扱ったが，クラスの雰囲気は和やかで，学生たちは時には英語，中国語などを交えながらグループ学習を行っていた。今回，留学生に「先生から教わる日本語クラスとグループで学ぶ日本語クラスの比較」を作文に書いてもらったところ，「それぞれ役に立つ」「別のクラスで先生から教わった内容を実際に使って会話の練習ができる」「日本人学生と話ができて，知らないことを教えてもらえる」という内容が目立った。一方，日本人学生の「今日の記録」を読むと，留学生に質問をされて答えられないと次はきちんと答えられるようにしようという前向きな姿勢が感じられ，また，グループ内の他の学生の説明を聞くことが自分の日本語を見直す刺激になっているのが窺えた。

この混在型クラスでは，自分の日本語に自信のない日本人学生を教師がサポートすることで，日本人学生からも日本語に関する質問が積極的に寄せられるようになり，結果として日本人学生，留学生両者が一緒になって日本語について考える場としての役割を果すことができたと考える。

注

1) 外国人留学生のみが受講できる一般基礎科目（学部）または共通科目（大学院）
2) 平成15年9月1日現在
3) 1学期は責任をもって日本語を教えるという意識を高める目的で，グループ学習による成果が把握できるようメンバーを固定したが，2学期は様々な留学生とコミュニケーションを図る目的で，隔週毎にメンバーを変更した。
4) 日本語文はふりがなを付けて示した。なお，留学生には自由に下線を引いてもらったため，抜き出し方の単位は統一されていない。また，今回の調査では下線を引いた留学生の数は考慮していない。
5) 英語のみで履修ができる修士課程のコース。12月に入学後，日本語課外補講で日本語を初歩から学ぶ学生もいる。
6) 留学生の受講者20名のうち3名が欠席した。

参考文献

国際交流基金日本語国際センター編（1983）『ヤンさんと日本の人々』ビデオ・ペディック
国際交流基金（1986）『Let's Learn Japanese Basic Ⅰ Vol.1』研究社